様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20560562
研究課題名（和文）現代ストレス社会における都市勤労者のレクレーション生活構造

研究課題名（英文）　A Study on the Recreational Life Structure of City Workers in the stressful JAPANESE society

研究代表者　齋藤　雪彦　（SAITO　YUKIHIKO）
千葉大学・大学院園芸学研究科・准教授
研究者番号：80334481

研究成果の概要（和文）：
都市近郊地域における都市勤労者のレクレーション生活構造について、主として地域からの孤立度、社会からの孤立度といった視点により分析を行った。その結果、中心市街地、都市近郊地域による若干の差異はあるものの、地方都市においても生活の個人化および孤立化が進行していることが窺われた。また都市近郊地域では農家や旧住民を対象にこれらの層を調べると、全体よりは割合が低いものの、農家や旧住民であっても生活の個人化・孤立化が進行していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
In the rurban areas, it were made clear that there were many workers, elder isolated in the communities or society even in farmers, old villagers, in the view points of recreational life analysis. Individualization were spread　even in rurban areas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：都市・農村計画学
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：ストレス、レクレーション、生活構造

１．研究開始当初の背景
現代の日本社会は、グローバル化に対応した市場原理を重視した政策の影響を受けて、競争やその結果としての格差が顕在化してきたと言われている。また、労働条件は、非正規雇用の増大、正規雇用の減少から、一般に厳しくなって来たと言われている。限られた時間に一定の成果を求められる職場が増加し、勤労者が時間に追われるという状況が一般化している。
人間関係に関しては、既存の年功序列等を重んじた価値観が薄れてきており、公共の場で、見知らぬ者同士が衝突する事例、事件が増加してきた。すなわち、人間関係においても共有するべき価値観が多様化したことで、コミュニケーションの不具合が起きていると言える。
こうして、自殺者は全国で年間３万人を超え、勤労者の数％が精神疾患の可能性があるとの報告もあり、ストレスが大きな社会問題となっている。
こうした中で、仕事で精神的エネルギーを消耗した勤労者にとって、これを回復するレクレーション（RE－CREATION）「以下　レク」

活動は益々重要な位置を占めてきており（本研究では、日常生活圏における「レクレーション」、非日常生活圏における「観光」を併せてレクレーションと定義している）、レク生活の全体像を検証し、レク政策やレク空間整備を推進する必要がある。

２．研究の目的

本研究では、勤労者のレク生活について、ｉ）属性・労働条件毎に見たレク活動について種別の組み合わせ、時間・頻度、空間の特徴を明らかにし、ⅱ）これにより、レクレーション活動とこれを規定する条件の相関を明らかにし、ⅲ）以上より、レク生活の全体像を明らかにしてその課題と方向性を提示し、レク活動の種類、時間・頻度、空間選択から公園、公共施設等、公的なレク空間の課題と方向性を整理することを研究の目的とした。

３．研究の方法

都市近郊地域において都市勤労者のレクレーション生活構造について、代表者に対するプレヒアリング調査、地域勤労者に対するヒアリング調査および悉皆アンケート調査により明らかにした。具体的には以下の通りに計画した。

（１）　平成 19 年度（準備期間）

既に既往研究のレビューを行っており、また千葉県松戸市の観光ボランティア団体に試行的にプレヒアリングを行っている。その後、東京都小金井市の観光・商工課等、商工会、市内事業所労組に調査協力を求めるとともに、基本情報の収集に努める。

（２）　平成 20 年度（先進事例に対するヒアリング調査）

まず、小金井市役所において、各担当に対するヒアリング調査を行い、観光・レクレーションの動向、施策に関する聞き取りを行う。次に、小金井市観光ボランティア団体構成員に対する対面ヒアリング調査を行い、生活時間、レク活動の種類、時間・頻度、空間、さらにレクに対する考え方を聞き取る。以上により、先進的なレク活動を過ごしている勤労者のレク活動のパターンをいくつか明らかにする（研究協力者である博士後期課程学生（近江屋一朗・１名）　にはヒアリング調査のテープ起こしと結果の整理を依頼する）。

（３）　平成 21 年度（一般事例に対するヒアリング調査）

まず、小金井市商工会、市内労組に対して、ヒアリング対象者の抽出と紹介を相談する。次にヒアリング対象者に対して、前年度と同様なレク活動に関する項目（生活時間、レク活動の種類、時間・頻度、空間）を聞き取る。前年度調査で得られたいくつかのレクパターンを用いて一般勤労者のレク活動の類型化を行い、同時にレク活動と属性との相関を見て、投稿論文にまとめる。（前述の研究協力者には前年度と同様にヒアリング調査のテープ起こしと結果の整理を依頼する）

（４）　平成 22 年度（一般事例に対するアンケート調査と研究総括）

まず、小金井市商工会、市内労組の各構成員を対象としたアンケートを実施するために、調査協力を改めて依頼するとともに、前年度までの成果を元にアンケート票を設計し、配布・回収する。定量的な分析によって前年度まで得られた知見の確認・修正を行って、投稿論文にまとめる。また、これまでの研究の総括を行い、総合的分析を行いながら研究報告書を作成し、関係自治体・団体へ送付する。依頼のあった場合には説明会をその都度開く。（前述の研究協力者にはアンケート調査の配布・回収・入力、結果の整理を依頼する）

４．研究成果

（１）はじめに

本編では、都市近郊地域における地域づくりへの若年・勤労者層の参加が少なく、地域資源管理の後継者問題、継続性が危ぶまれているという問題意識があり、勤労者層の多くが、地縁と関係なく、個人、家族で余暇を過ごして、地域におけるつきあいがほとんどない（都市近郊農村の都市化の一形態）ことが明らかになり、地域資源管理の持続可能性という点で克服しなくてはならない課題として提起することができた。同時に勤労者層が地域へ帰っていくための条件、阻害要因の明確化と除去が今後の課題であると言える。

近年、大都市においては、生活の個別化が進み、個室にテレビが完備され、家庭内でも個食化が進んでいると言われ、ゲームやインターネットなど一人で余暇生活を送ることが一般的になってきた。これは90年代、00年代を通して情報化社会、消費社会、個人主義が深度化してきた一つの現れでもある。一方、農村では、昔ながらの祭礼や近所づきあいなどが残存し、マスコミ等で、古き良き日本のイメージが投影される存在となっている。

既往文献を振り返ると、高度経済成長時代を出発点として、テレビや車など生活必需品を視点として、農村の生活の近代化は指摘されてきた。しかし、共同体の機能は依然として残存していることはいわば前提であり、農

村社会がどのように変質してきたかについては、特に近年、研究があまり見られない。

また、子どもの遊びの研究では、農村の子どもの遊びが都市化している実態が明らかにされているが、大人についてもその生活の都市化が進んでいるのではないかという仮説の基に研究を進めた。すなわち、私たちは農村社会に対して古き良きものを求めがちであるが、若年層まで視野に入れた時には新しい考え方が浸透した農村（生活が都市化した農村）を前提とすることが求められるのではないか。

すなわち、農村計画学の分野において、古き良きものを理想として（共同体、助け合い、異世代交流、井戸端会議など）、理想に近づくこと（古き良きものに光を当て、残存させる、もしくは再生する）を一つの方向性と考える傾向にある。これを否定するものではないが、一方で、これまでとは不連続な新しい農村の姿を前提とした計画論が求められるのではないかという問題提起を試みるものである。私たちは新しく発生した社会現象を認めるより先に否定的に捉える傾向があるからである（子どもの携帯ゲーム遊びなど）。さらに、近年、地域資源管理を含む地域づくりが各地で自然発生的に散見されるが、これは古くなったあるいは衰退してきた共同性を再構築する運動であるとも位置付けられるが、一方で、若年層を中心とした不参加層の広がりが課題である地域も多い。概ね、地域づくりにおいて、地域社会の10人に１人から１００人に１人が参加しているという状況であり、不参加層（１００人のうち、９０人から９９人）の実態に焦点を当てた研究は少ないとも言える。すなわち、地域づくりの継続、発展のためにも、住民の余暇活動の個人化を明らかにしつつ、個人に分解されたからこそ生まれた共的活動への参加意欲を見定め、こうした人々の地域づくり等共的活動への参画の可能性を考えることを研究の目的とした。研究の対象地域は、筆者らが地域づくりに関わり、調査が容易な千葉県君津市貞元地区とした。研究の方法としては、アンケート調査を悉皆的に実施し、1000部配布し、有効回答は400部余りであった。

(2)生活の個人化

データを見ると、約７割（70.4%）の人が「家族もしくは個人で主に余暇を過ごす（個人・家族型）」と答えている。地域社会の組織や個人とも過ごす方は３割に過ぎないということになる。都市と同様、個人、家族で生活を送り、地域社会と接点を持たない層が増えていることが分かる。また、地域組織の活動に「あまり参加しない」（組織不参加型）と回答した方が、約３割もいた。同時に、「地域であまり個人的つきあいがない」（つきあいなし型）と回答した方が約３割もいた。個人・家族型で地域活動あまり参加せず、個人的つきあいもあまりない最も、地域から孤立した層は359名中51名で約1割強見られた。

これは、新住民や非農家を含めた数字であるが、旧住民や農家について見る。例えば、旧住民で約7割が「個人・家族型」（新住民と変わらない）、約2割が「組織不参加型」、約2割が「つきあいなし型」であった。農作業の中心的役割と答えた方の約5割が「個人・家族型」、約1割が「組織不参加型」、約1割が「つきあいなし型」と答えている。

職業が農家であると答えた方の約4割が「個人・家族型」、約2割が「組織不参加型」、約１割が「つきあいなし型」と答えている。

年齢について見ると、「個人・家族型」と回答したのは、新住民のうち、40代以下が約8割、50-60代で約7割、70代以上が約9割であった。次に旧住民について見ると、40代以下が約7割、50-60代が約7割、70代以上が約4割であった。新・旧住民毎の年齢別の「組織不参加型」、「つきあいなし型」の差異は統計上認められなかった。

つまり、旧住民は、全体に対して、余暇の個人・家族化の割合はほとんど同じであり、「組織不参加型」、「つきあいなし型」は全体に対して、それぞれ約１割ずつ少ないが、それでもそれぞれ約2割は孤立層が存在していると言える。農作業を中心的に行うとした層（全サンプルの１/4）、職業が農家と答えた層（全サンプルの約1割）でさえも、「組織不参加型」がそれぞれ約１割と約2割、「つきあいなし型」が約1割ずついる。また、年齢で見ると、新住民の40代以下、70代以上の「個人・家族型」が目立った。特に、都市地域で指摘される「高齢者の孤立」は新住民でその傾向が確認された。一方、旧住民の７０代以上は「個人・家族型」が目立って少なく、地縁社会との関係が強い方が多かったが、40代以下、50-60代はいずれも全体の割合と変わらず、若年層の生活の個人化が確認された。

(3)終わりに

中心市街地、都市近郊地域による若干の差異はあるものの、地方都市においても生活の個人化および孤立化が進行していることが窺われた。また都市近郊地域では農家や旧住民を対象にこれらの層を調べると、全体よりは割合が低いものの、農家や旧住民であっても生活の個人化・孤立化が進行していることが明らかになった。同時に年齢階層別にみると若い世代から高齢世代に連れて、これらの層の割合が減って行くが高齢世代であっても生活の個人化・孤立化が進行していることが分かった。また、一般的に社会的孤立というと高齢世代を指すが、これは高齢者が孤立してなおかつ自活できなくなることから注目されていることであり、実際には（自活ができるが）勤労者層の孤立がより顕著であることが明らかにできた。これは福祉学分野で言う社会的孤立の予備軍であると言える。今後、こうした勤労者が高齢化し自活能力がなくなっていくとき社会問題はさらに悪化することが容易に想像される。政策的提言が今後の研究課題である。

参考文献

１）齋藤雪彦・須川陽平（2010）都市近郊農村における余暇生活の実態と個人主義化、都市近郊農村における生活の都市化に関する研究　その２、日本建築学会学術講演梗概集E-2 557-559

２）須川陽平・齋藤雪彦（2010）都市近郊地域における就業状況に関する基礎的研究―都市近郊農村における生活の都市化に関する研究　その１―　日本建築学会学術講演梗概集E-2 555－556

３）藍沢宏ほか（2000）住民の地域社会活動の形成とその展開方法に関する研究、日本建築学会計画系論文集

４）川岸・北野ほか（1996）時間的・空間的側面からみた余暇活動の動向と特性について、日本建築学会計画系論文集

５）川岸・北野他（1997）近隣空間における余暇活動の動向と特性について、日本建築学会計画系論文集

６）桜井他（1983）余暇生活のグループ化傾向からみた集会関連施設需要の構造、日本建築学会計画系論文集

７）桜井他（1985）生活時間と階層的視点からみた余暇性向とグループ活動参加の動向、日本建築学会計画系論文集

８）桜井ほか（1985）階層構成の類似性からみたグループ活動の類型化と動向、日本建築学会計画系論文集

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①齋藤雪彦：地域資源管理に関わる担い手形成の課題としての地域生活の個人化・孤立化 2011 年度日本建築学会大会梗概講演集 E-2、2011 年

②須川陽平・齋藤雪彦：都市近郊地域における就業状況に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、2010 年

③齋藤雪彦・須川陽平：都市近郊農村地域における余暇生活の実態と個人主義化、日本建築学会学術講演梗概集、E-2、2010 年

〔学会発表〕（計３件）

同上

〔その他〕

ホームページ等

千葉県君津市などにおいて成果報告会を適宜主催

６．研究組織

(1)研究代表者

齋藤　雪彦（SAITO YUKIHIKO）
千葉大学・大学院園芸学研究科・准教授
研究者番号：80334481

以上